足尾鉱毒

京都大学・原子炉実験所 小出裕章

I. 近代文明の開発とは?

人間は、地球という惑星に現れた新参生物種です。地球の歴史は 46 億年、人類らしき生物種が地球上に現れたのは 400 万年前といわれます。もし、地球の歴史を 1 年に縮めて考えるなら、人類が地球上に現れたのは、冬が過ぎ、春が過ぎ、夏も秋も過ぎ、また冬が来て、そして大晦日になった夕方のことに過ぎません。その人類もたくさんの生物種のうちの 1 種に過ぎませんし、自然の生態系の中で、長い間、慎ましく生きてきました。しかし、約 10 万年前から武器を使って狩をすることを覚え、約 1 万年前から農耕を覚え集落を作って定住生活を送るようになりました。それらは人間にとっては、他の生物種から自らを区別するための大きな進歩ではありましたが、それによって、人間は生態系から一方的な収奪を始める初めでもありました。特に、産業革命以降に始まった近代文明による開発は、石炭、石油、金属など、厖大な地下資源を一方的に収奪することで開花しましたが、その影では、収奪した物資を極めて不適切に生態系に放置したため、悲惨の被害が多発してきました。この講義は「物質開発倫理学」ですが、まさに「物質」を収奪して「開発」することの、「倫理(是非)」が問われています。

特に日本は、長い間の鎖国を欧米によって無理やり開国され、以降は自らもアジアの諸国と同様に侵

略されるか、あ るいは自らが侵 略者となって欧 米に伍して強国 になるかの選択 を強いられまし た。もちろん、 日本は後者の道 を選択したので すが、狭い国土 の中で、急激に 近代化したため、 多数の悲惨な公 害を生み出しま した。その最初 にして激烈な公 害が足尾鉱毒で した。

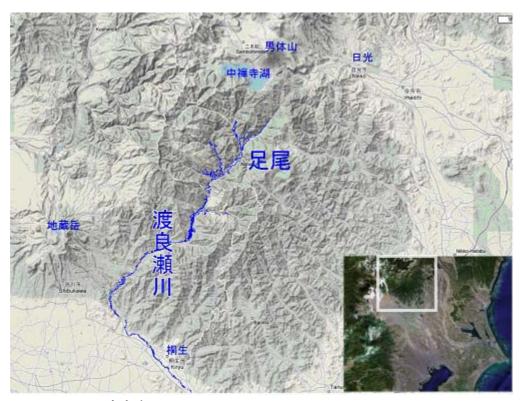


図1 足尾と渡良瀬川

Ⅱ. 足尾銅山

足尾は関東平野の北限に連なる山間の地です。観光地として有名な日光とは、日光を抱く山々の稜線を隔てた南側にあり、その山々から流れる沢は、渡良瀬川となって関東平野に流れ込んでいます。もともと水量豊かな渡良瀬川の水は、数年に1度洪水を起こしましたが、その洪水はむしろ水源地帯の腐葉土を下流の田畑に運ぶ貴重なものとして歓迎すらされてきました。

その足尾で銅が発見されたのは 1600 年頃のことで、 足尾銅山の歴史は古い。当初は徳川幕府直轄の銅山と して稼業し、一時は年間 1500 トンの銅を産出し、オラ ンダに向けて輸出もしていました。しかし、銅の産出 を続けるうちに、坑道が地下にますます深くなり、地 下水の湧出が激しくなって 18世紀終わりを待たずに休 山に追い込まれました。

ところが、明治時代に入って足尾銅山は再度隆盛を極めるようになりました。その時代に、日本は日清、日露の戦争を戦い、世界の列強に伍そうとしました。そのためには、欧米型の産業を興し、資源浪費型の国家を作り上げなければなりませんでした。明治政府は富国強兵、殖産興業を基本原理として、産業の近代化に邁進しました。とりわけ、銅は海外での需要が多く、日本にとっては外貨を獲得するための主要な輸出商品

となり、産出した銅のほとんど全てを輸出していました。そのため明治から大正にかけて、銅の輸出額は総輸出額の数%を占め続けています。足尾の銅鉱山はその基礎として開発、利用されたのでした。

しかし、その影では、足尾鉱山から 流れ出す鉱毒は周辺の生命環境を著 しく破壊しました。煙突から放出され た鉱毒は足尾一帯の山を禿山にしま したし、製錬の残渣は100万平方メー トルを超える堆積場を次々と埋め尽 くし、今日までの総量では1000万立

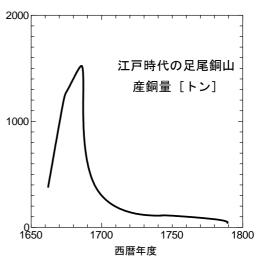
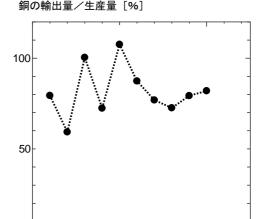


図2 江戸時代の産銅量



西暦年度 図3 明治初期における銅の輸出率

1900

1890



図4 明治末期の足尾銅山

米を超えました。禿山にされた山は保水力を失い、雨が降れば簡単に洪水となりました。そして、洪水は堆積場を襲って、鉱毒を下流に流しました。時には、降雨にまぎれて、意図的に堆積場から鉱毒が渡良瀬川に流され、栃木、群馬の約1600の市町村で田畑の被害が生じ、流域の多数の漁民、農民の健康と生活を奪いました。

加害者である古河が被害に対する金 銭を最初に払ったのは、1892年の洪水 で著しい被害が出た後でのことでした。 その翌々年1894年には、被害はますま す激しくなり、古河は再度示談金を払う ことになりましたが、その時、古河が作 成し農民側に署名を強制した契約書に は、次のように書かれています。

「同銅山御稼業により常時 不時を論ぜず、鉱毒、土砂、 その他渡良瀬沿岸我等所有 の土地の迷惑になるべき何 等の事故相生じ候とも、損 害賠償その他苦情がましき 儀一切申し出まじく候」

この条文について、英国 人で日本についての研究家 でもあるケネス・ストロン グは書いています。

「この第二の契約書に記されている文言はとんでもないもので、脅迫されて押しつけられたものでなか田とが取り返しのつかないまた農民たちの田地にとの不毛の土地にされてしまって極度の困窮状態によかれているのでないまたとしたら、いくら下野の農

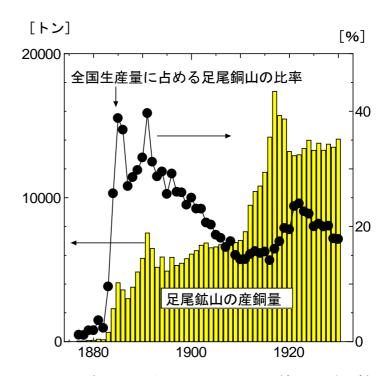


図5 明治から昭和にかけての足尾鉱山の重要性

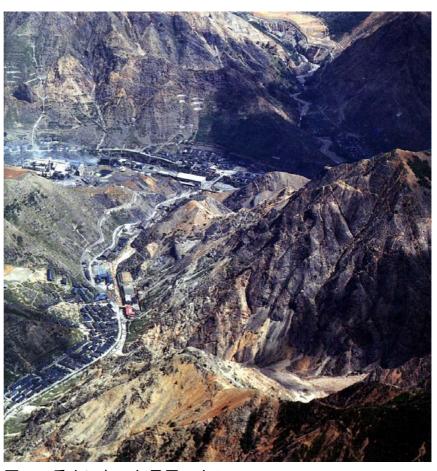


図6 禿山になった足尾の山々

民が気が小さいといっても、まともな分別を持った人間がこれに調印することが一体どうしてあり得た のか、ほとんど想像がつかないようなしろものだったのである。」

こうして、被害はさらに拡大していきましたが、それでも、歴代の政府は富国強兵の基本原則を曲げず、足尾銅山の庇護を続けました。疲弊しきった農民・漁民は、東京に向けて数度にわたる「押出し」をして救済を訴えましたが、政府は警察力を使って、住民を弾圧、投獄しました。それでも鉱毒による被害は増える一方でした。その当時、渡良瀬川は、江戸川となって、東京に流れ込んでいましたが、鉱毒が東京に流れ込むのを嫌った政府は、埼玉県関宿で渡良瀬川を銚子に流れる利根川に付け替えるとともに、鉱毒溜めの池を作るため、栃木県谷中村を水没させることにしました。谷中村には450戸、2700人の住民が住んでおり、彼らは鉱毒の被害者であって、加害者ではありませんでした。しかし、日本の

国は、富国強兵の基礎である足尾銅山を守るために、彼らを犠牲にすることにしたのでした。小さな谷中村は強大な国家の前に無力で、鉱毒によって疲弊させられた生活と借金、国、県、村などの行政、警察などの弾圧によって崩壊させられて行きました。しかし、わずか 19 戸ではありましたが、一部の住民はあくまでも国の無法に抵抗を続けました。国は、ついに土地収用法を適用して、住民が現に生活している家屋を破壊し、谷中村に水を引き込んで水没させました。

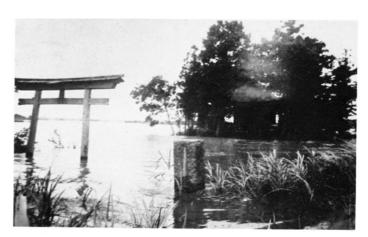


図7 水没させられた谷中村

Ⅲ. 田中正造

田中正造は自らを「予は下野の百姓なり」と呼んでいますが、栃木県佐野市の庄屋の家に生まれました。彼は初代帝国議会で10年間衆議院議員を務め、足尾鉱毒に苦しむ住民の救済を訴え続けました。それでも、時の政府が日清、日露の戦争に力を注ぎ、住民を守ろうとしないため、「亡国に至るを知らざれば之れ即ち亡国の儀につき質問書」を提出して、1901年10月、議会を捨てました。その中で彼は「民を殺すは国家を殺す也。法を蔑ろにするは国家を蔑ろにする也。皆自ら国を毀つ也。財用を濫り民を殺し法を乱して而して亡びざるの国なし、之を奈何」と書いています。

そして、その年の12月、正造さんは勝子夫人を離縁し、 天皇直訴に及びました。もちろん、直訴は死罪ですが、 正造さんは自らの命と引き換えに世論の喚起を狙ったの



図8 田中正造さん

でした。幸か不幸か、その直訴は天皇警護の警官隊によって阻まれ、正造さん自身は即日釈放されました。

正造さんの直訴を受け、一時期世論は足尾鉱毒問題に沸騰しましたが、それも時の経過とともに忘れられていきました。万策尽きて正造さんが谷中村に入村したのは 1904 年でした。荒廃した水源地は洪水をますます加速させ、渡良瀬川の堤防は何度も決壊するようになりましたが、国や県はそれを修復するどころか、むしろ意図的に破壊し、谷中村住民の追い出しを図りました。国家の前に無力な住民たち

は1戸また1戸と谷中村を離れていきましたが、それでも立ち退きを拒否する住民が残りました。しかし、ついに今からちょうど 100 年前の1907 年、国が強制執行を行って、住民の家屋を破壊しました。それでも、住民たちは水没を免れた高台に仮小屋を建てて、抵抗を続けました。正造さんは以降1913 年に行き倒れるようにして死を迎えるまで、水没させられた谷中村と、その住民に寄り添って過ごしました。



図9 仮小屋を立てて抵抗を続ける谷中村残留住民

Ⅳ. 終わっていない鉱毒問題

その後も、足尾銅山は政府の庇護の下、 稼動を続けました。採掘できる鉱石の品 位がどんどん低下し、自分の鉱山からの 産銅量は低下し、一時は命脈をたたれる 寸前でした。しかし、戦後の朝鮮特需で 息を吹き返し、その後の高度成長の波に 乗って、国内の他の鉱山からの鉱石を運 び込み、さらには外国からの鉱石も運び 込んで稼動を続けました。そして、ベト ナム特需で最盛期を迎えたのでした。

その足尾銅山も今では完全に閉鎖となりましたが、鉱毒はいまだに堆積場に野ざらしになって放置されたままです。長い年月を考えれば、堆積場の崩壊によっていずれはまた渡良瀬川の汚染が起きるでしょう。

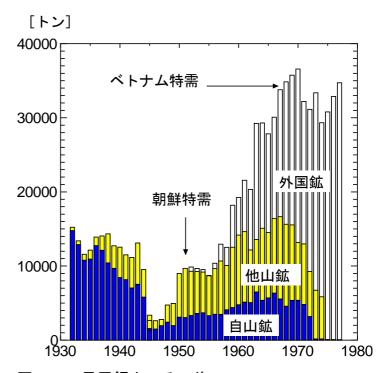


図10 足尾銅山のその後

天地と共に生きる

足尾鉱毒事件に文字通り全身全霊 を捧げた田中正造さんは、死を迎えた 朝、見舞客に対して言いました。

「お前方大勢来ているそうだが嬉しくも何ともない。みんな正造に同情するだけで正造の事業に同情して来ているものは一人もない。おれは嬉しくない。行ってみんなにそういえ。」

正造さんが求めたものは、汚染され、 破壊された自然そのものを回復する ことでした。

「この正造はな・・・天地と共に生きるものである。天地が滅ぶれば正造もまた滅びざるをえない。今度この正造がたおれたのは、安蘇、足利の山川が滅びたからだ。・・・日本も至るとこ

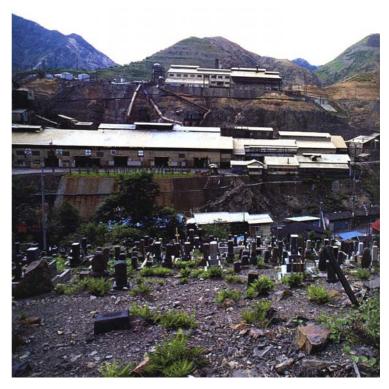


図11 廃墟となった足尾銅山

ろ同様だが・・・。故に見舞いに来てくれる諸君が、本当に正造の病気を直したいという心があるならば、まずもってこの破れた安蘇、足利の山川を回復することに努めるがよい。」

すでに足尾銅山は完全に閉山となり、今はむなしく廃墟が残るだけです。いったい私たちはどのような国を作り、どのような社会を作ろうとしているのでしょうか?

「対立、戦うべし。政府の存立する間は政府と戦うべし。敵国襲い来たらば戦うべし。人侵入さば戦うべし。その戦うに道あり。腕力殺戮をもってせると、天理によって広く教えて勝つものとの二の大別あり。予はこの天理によりて戦うものにて、斃れてもやまざるは我が道なり。」

足尾鉱毒年表

足尾鉱毒年表	
1610	銅山発見
1613	幕府直轄、すぐに休山
1648	幕府による再度の開発
1684	1500 トンの最高生産
1796	休山
1876	古河市兵衛、経営権を握る
1877	古河による操業開始
1881	鷹ノ巣直利発見
1884	横間歩大直利発見、生産量日本一の銅山になる
1884	鉱山近傍の山々の樹木が枯れる
1885	渡良瀬川の魚類大量死始まる
1887	渡良瀬川の魚類死滅
1888	渡良瀬川大洪水、栃木・群馬の 1650 町歩に鉱毒被害
1890	谷中村議会、古河に損害賠償と製錬所移転要求を決議
1891	田中正造、帝国議会で鉱業停止要求。
1892	住民と古川の第1回示談契約
1893	足尾加入臨の 77%および全民有林が壊滅
1894	日清戦争勃発
1894	鉱毒が東京に流れるのを防ぐため、千葉県関宿で渡良瀬川を江戸川から利根川に付け替える
1894	第2回示談契約、永久に被害の補償を放棄。
1896	渡良瀬川大洪水、渡良瀬川、利根川、江戸川流域 1 府 5 県 4 万 6000 町歩に鉱毒被害
1897	第1回、第2回、東京「押出し」
1897	政府による鉱毒予防命令
1898	渡良瀬川大洪水、予防工事命令による沈殿池決壊。鉱毒被害激化
1898	第3回東京「押出し」、被害農民1万人
1900	第4回東京「押出し」川俣事件、被害農民1万2000名、官憲による弾圧
1901	田中正造、帝国議会で最後の追及、議員辞職
1901	田中正造、天皇に直訴・失敗
1902	栃木県谷中村、埼玉県利島、川辺両村の遊水地計画
1902	埼玉県利島、川辺両村は遊水地計画を跳ね返す
1903	谷中村の遊水地計画始まる
1904	日露戦争勃発
1904	田中正造、谷中村入村
1905	谷中村の買収受諾住民が集団移住。
1907	谷中村に土地の強制収用が認定される
1907	谷中村残留民仮小屋を建てて抵抗
1907	足尾銅山の労働者の暴動
1913	田中正造死去
1917	残留民が谷中村から移住
1926	渡良瀬川大洪水、鉱毒被害が再来
1936	渡良瀬川洪水、鉱毒被害
1947	渡良瀬川洪水、鉱毒被害
1948	渡良瀬川洪水、鉱毒被害
1949	渡良瀬川洪水、鉱毒被害
1958	源五郎沢堆積場決壊。6000 ヘクタールの田圃が鉱毒被害
1973	足尾銅山での採掘終了